

## 内国絵画共進会

内国絵画共進会は日本画の復興を目的として開かれた官設公募展で、明治十五年と同十七年の二回、上野で開かれた。第一回共進会の際の規則(大政官令第十四号)に

西洋繪ヲ除クノ外流派ノ如何ヲ問ハス都テ出品スルヲ得ベント  
雖モ古圖ヲ其儘模寫シタルモノ及ヒ燒繪、染繪、織繪、縫繪、  
蒔繪等並ニ他人ノ畫キタルモノハ出品ヲ許サス

とあり、洋画の出品は拒絶された。また、日本画は各流派別に出品することが義務づけられた。こまごまとした規定があり、第二回共進会では画面の大きさ、表装方法まで規制されている。第一回共進会では全国から二千四十八人、作品数四千六十八点もの応募があり、審査長佐野常民以下各派大御所を中心とする審査員(龍池会会員が過半数を占めた)が審査にあたった。その結果、最高賞の銀印を授与されたのは橋本雅邦(狩野派)、狩野守貴(同上)、田崎草雲(南北合派)、森寛齋(円山派)で、銅印は川辺御楯(土佐派)、佐竹永湖(文晁派)、川端玉章(円山派)、原在泉(原派)らを含む二十五名に、褒状は七十五名に授与された。のちに草創期東京美術学校絵画科の主任教師となる橋本雅邦が狩野派を代表して最高賞の筆頭に位置づけられていることが注目される。また、同様に絵画教師となる狩野芳崖、巨勢小石、狩野友信、結城正明らもこぞって出品して

おり、ほかに彫刻教師となる加納鉄哉も南宗派の画家として出品している。

第二回共進会では金章が守任貫魚(住吉派)、銀章が川辺御楯、山名貫義(土佐派)、橋本雅邦、瀧和亭(南宗)、幸野楳嶺(塩川派)、鈴木百年(鈴木派)らを含む十五名、銅章は原在泉、巨勢小石、荒木寛敏(南北合派)、岸竹堂(岸派)、川端玉章、今尾景年(鈴木派)らを含む三十二人で、褒状は百五十三人に授与された。芳崖はかろうじて褒賞受賞者の中に入っている。

政府がこのように大規模な日本画公募展を二回も開いた背景には当時政府が進めていた明治新宮殿造営に必要な画家を選抜しようという意図が隠されていたとする研究(関千代「皇居杉戸絵について」『美術研究』第264号)もあるが、この展覧会の龍池会路線に沿った運営方針は、そのような意図ともよく符合するものであったと言えよう。

こうして、絵画共進会は逼塞していた日本画家に再び筆をとる機会を与え、復興気運を盛り上げることになった。しかし、主催者側には旧套墨守のみをこととする者が多く、それがさまざまな形で現われたため、第二回目になると批判も起こって来た。フェノロサも旧態を墨守し洋臭を排斥しているだけでは新時代の期待に応えうる絵画は生まれまいとしてこれを批判した。彼は絵画共進会開催のきっかけを作ったが、共進会の実体は彼の構想と齟齬する面が多かったのである。